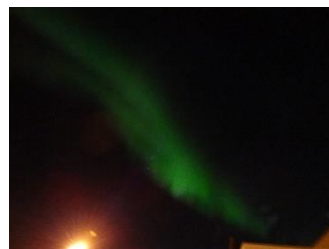


アラスカの旅

深井美智子

3年前の8月の終わり、サンフランシスコ経由でアラスカ、フェアバンクス空港に到着したのは深夜の1時過ぎであった。フライトが遅れたわけではなく、サンフランシスコで一泊せずにフェアバンクスに入ったため、遅い時間の到着となった。スーツケースをターンテーブルから取り上げたとき、Northern lights!と叫ぶ声が聞こえた。「えっ? オーロラ? まさか!」と、思わず一緒に行った友達の背中を押して空港の駐車場へ走った。小さな空港なのですぐ外に出ることができた。空を見上げると微かなグリーンの光の帯が揺れている。写真等で見るのとは少し違うが、確かにオーロラだ。じっと見つめるとスーッと消え、違う空にまた現れる。そこに居た50人ほどの人たちは、みんな興奮している。この時期にしかもフェアバンクスの空港でオーロラが見られるのは本当に稀で、すごくラッキーだったね、とタクシーの運転手が教えてくれた。



翌朝、アラスカ鉄道に乗りデナリへ向かった。以前はマッキンリーと呼ばれていたが、1980年代にアラスカ原住民の呼び名の「デナリ」へ名称変更された国立公園である。アラスカ鉄道は川のほとりを「風景を楽しんで」というようにゆっくりと進む。途中で「大きなビーバーダムがあります」などのアナウンスが車内に流れる。車両は窓が大きな展望車であり、車窓が楽しめる。デナリでは、公園内のバスツアーに参加。この公園では一部を除いては一般車両の乗り入れを禁止し、その保護に努めている。スク



ールバスのようなあまり乗り心地の良くない専用バスで、奥へと進む。ドライバーはガイドも兼ねており、運転しながら、周りの説明をしながら、目は常に野生動物を探している。大忙しだ。野生動物を見つけると、我々に「右側、○時の方向に○○がいます」と教えてくれる。ほとんどの場合かなり遠いので、そのように言われても我々ではなかなか見つけられない。ドライバーが使用している双眼鏡にはビデオカメラが付いており、その映像が車内の小さなテレビに映る。それを頼りにみんな必死になって窓にしがみつき動物を確認しようとする。そして確認できると一斉にカメラを向ける。結構おもしろいアクティビティーである。

デナリからフェアバンクスに戻るとき、列車と飛行機の時間とがうまく合わず、タクシーを頼んだ。ドライバーはデナリ在住の女性で、2時間ほどの車中、いろいろな話をしてくれた。彼女は、テキサス出身で結婚してからアラスカへ来たと言っていた。ここに住む人たちは、開拓の精神に富んでいて、アラスカに住むことに誇りをもっている。出産にしても病気にしても、病院は遠く、買い物も長い冬もすべて不便だけれど、この生活を楽しんでいる、と。「よさ」を殊更強調していると取れなくもなかったが、同じアメリカ国内でもアラスカ

への移動は、新天地を求めて「決意の移住」とも感じられた。そんな話を聞きながら、私は道路横にところどころ、郵便受けらしいものがあるのに気が付いた。付近には家も何も見当



たらない。聞けば、そこからずっと奥に家があるらしい。スクールバスなどはそれを目印に止まってくれるという。あたりは、森ではなく雑草の荒野が一面広がっている。かなり道路から離れているのだろう、その低い雑草のはるか向こうにも目視で家は確認できない。デナリからフェアバンクスへの道路は、おそらく一本だけで、この道路沿いに町はなく家も店もほとんど見ることにはなかった。毎日地下鉄に乗って仕事に行き、スーパー

で買い物している私には考えられない生活がここにはあった。ドライバーの彼女は「慣れれば大丈夫よ。大きな冷凍庫には食品が保存してあるし。それより、こんな雄大な自然の中で、ゆったりと生活できることは最高の贅沢かも」と言う。

今回の旅は、友人の頼みで私が同行したものであったが、思いがけずオーロラを見ることができ、またアラスカに生活する人の強い「心意気」に触れることができた。私に同行を求めてくれた友人に感謝である。